

---

# ベルツナ小説

流麗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ベルツナ小説

### 【コード】

N2019H

### 【作者名】

流麗

### 【あらすじ】

ベルツナ小説ですベルが正式な王位継承権をもつてますお姫様大好きですそれでもいいならどうぞ〜（・・）つ

愛し方は人それぞれ

愛し方は人それぞれ

好きだよ 綱吉

金の髪が反射してきらきら光る  
長い前髪に隠された赤い瞳は真っ直ぐに俺をみている

「聞いてんの？こんなに好きだっていってんのに  
王子お前のこと愛してんだぜ？」

チラつく赤く染まったナイフ

俺の血によって

「ね 綱吉 いっぱい愛してね 俺だけのこと  
うん いや拒否権ないし」

ベルはナイフを赤い舌でなめあげた

「切れっないのっ？っ」

腹からの出血はとまらない  
きつと俺の心臓が止まるまで止まらないだろう

そんな状況でそんな状況にした男を心配するとは我ながらお人好しだ

ちがうな…

俺 コイツが好きなんだ

だから 彼の体に傷なんかついてほしくないんだ

「綱吉は優しいから嫌いなんだよ 博愛主義は俺のタイプじゃないだから

お前の心臓止まったら 俺だけのもんになって」

博愛主義？冗談じゃない

俺はいつだって一人のことしか考えてないよ

「好きっだよ…ベル」 あんたは信じないと思っけどね

「ねえ綱吉…死んじゃったの？」

ベルはピクリともしなくなつた俺の体に優しく触れた

「冷たいな 死んじゃったんだ」

まるで 最愛の恋人にするかの

ように俺の唇をなぞる

「愛してる 俺だけのお姫様 (princess)」

d

## 瞳の色

### 瞳の色

お姫様が俺に顔を近づけた

お姫様の顔が近くに映る薄茶色の猫っ毛の髪同じく薄い茶色のこぼれんばかりの大きな瞳

俺の大切に大好きなお姫様

「綱吉？」

「ね、俺に目見せてよベルの目みたことないんだよ？」

目？

ああ…そっか 前髪に隠れて見えなかったんだよな

視界悪いケド慣れるとどうってことはないから忘れてたし

「うししっ いーよ

おヒメ様にだけ特別に見せてあげる」

そう 特別だよ

王子の顔を見ることが出来る人間なんて

本当に特別

「だつてお前は俺のヒメだもん 勿論いーよ」

お姫様の言

うことなら

「なんでもするよ

俺だけの princess」

「ベル？」

俺は綱吉の手を持つと自らの髪を持ち上がらせた

暗くてまだらだった視界がいつきに広がる

「わぁ 綺麗 ブルーアイなんだぁ」

「うしししし そーいわれると嬉しいな、 お姫様に言われる

と特にな」

俺は少し横に広がる 刃物を思わせる伶俐な相貌を歪まして笑

った

つられたように花のような可愛らしい顔で綱吉は笑う

「ベルは本当に王子さまなんだね」

「しし…そーだよ

その王子の姫なんだから自信持ちなよ

もつと堂々とワガママいって俺のこと振り回していいのは綱吉だけ  
なんだから」

「うん、ありがとうベル　というよりもうベルの姫って決定事項な  
んだ」

「当たり前じゃん

だって俺王子だもん」

e n d

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2019h/>

---

ベルツナ小説

2010年10月13日11時54分発行